注意事項

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者・「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】
夢幻世界の王　β版

【作者名】
月乃杜

【あらすじ】
・
ＭＭＯ―ＲＰＧと呼ばれるゲームが存在している。
上月彰吾はそんなゲームが大好きで、高倉コーポから発売されたＭＭＯ―ＲＰＧを幼馴染みの赤坂百合を誘って遊んでいた。
そんな彰吾の夢は、アニメなどの架空の世界にしか存在しないＶＲＭＭＯ―ＲＰＧをプレイする事。
そんなある日、彰吾の許に高倉コーポからの宅配便が届いて……

第1話：ＶＲＭＭＯ―ＲＰＧ

.

ＶＲＭＭＯＲＰＧというのを知っているだろうか？

まあ、所謂処のヴァーチャル・オンライン・ゲームの事である。

とはいえ、容量やシステム的に実現させるのがキツいのか、普通のオンライン・ゲームは兎も角としても未だにそちらは出る気配もなかった。

何しろ、リアリティーの追求だとか、感覚のあれやこれやだとか色々と弄らねばならない事は多い。

それ故に、そんな未来型なゲームは物語の中だけの話でしかないと、彼も諦めていた。

高校生、上月彰吾（かみつきしょうご）。

いつか本当にＶＲＭＭＯＲＰＧをプレイしてみたい……そんな夢を見るゲーム好きの少年である。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

彰吾は某県Ｓ市の桜川高校の二年生。

今日も今日とて幼馴染みの少女、赤坂百合と教室内でゲーム談義をしていた。

内容はオンライン・ゲーム【英雄譚インフィニット・ブレイバー】に

ついて。

アクション性が強くて、やり込み要素も多いゲームで、前作【幻想界（インフィニット・ファンタジー）】と世界観が同一という事もあって、データ・コンバートをする事により前作のプレイヤーに優しいシステムを満喫出来た。

まあ尤も、コンバート無しでは獲られない様な武器とスキルを一個ずつ、始めから持っているだけだが。

「そろそろ【英雄譚（インフィニット・ブレイバー）】も過渡期なのかな？」

百合は溜息を吐きながらジュースを啜り、そんな事を洩らす。

「いや、まだイケるだろ」

「そうかな？　だってさ、もうボクも彰ちゃんも既にレベル２５５。カンストしちゃってるんだよ？」

「う……まあな。スキルも覚えたモノは全部９９まで上げてカンストだしな」

【英雄譚（インフィニット・ブレイバー）】に於けるプレイヤーの最高レベルは２５５でスキルの熟練度は９９となってるのだが、当たり前の話そう簡単に上がるものではない。

だがずっと続けていればいずれは辿り着くもので、彰吾と百合も半年以上前にはその領域に来ていた。

別にこの２人は、ネット廃人という訳ではない。

単純に2人で効率良く狩りを行ってきただけだし、少しレベルを上げたら少し強めの敵とエンカウント出来る場所に移動していただけである。

アクション重視のゲームなだけに多少、効率的に戦えればダメージさえ通るなら意外とやれるものだ。

元々、百合はゲームを余りしない方なのだが、彰吾に誘われて前作の【幻想界（インフィニット・ファンタジー）】から一緒にプレイしていた。

幼馴染みの趣味に付き合っている訳である。

「次回作の話もチラホラと出だしたし、そろそろ潮時かもよ？」

「ああ、そういや情報誌に挙がってたな」

タイトルは【夢幻王（インフィニット・ドリーム）】だったと記憶している。

「けどさ、あれってまだどんな形のモノか発表されてないだろ？判ってるのは前作、前々作と同じ世界観の違う大陸の物語ってくらいだし」

「う～ん、そうなんだよ。ボクも気になってはいるんだけどね」

「それはまた、百合も変わったよな。昔はゲームなんてって感じだったのに」

「それは……彰吾が悪いんだよ。ボクを彰ちゃんの色に染めるから」

「ブッ！」

行き成り科を作り、頬を朱に染めて言う百合に彰吾が思わず噴き出す。

直ぐにキョロキョロと辺りを見回し、彰吾は百合に小さな声で言った。

「ば、バカ！　何つー危ない事を言ってんだよ！」

「フーンだ、意地悪な事を言うからだよ」

「ハァ、悪かったよ」

嘆息しながら謝る彰吾に百合は満足そうに頷いて、話題の転換をする。

それは噂のレベルではあるが、真しやかに流れている一つの情報に関してだ。

「そういえば彰ちゃんは聴いてる？　次の【夢幻王（インフィニット・ドリーム）】が実は、ＶＲＭＭＯじゃないかって話……」

「そうなのか？　でもさ、前に百合は『そんなの漫画じゃあるまいし、出せる訳が無い』とか否定していたんじゃなかったか？」

「うん。けどね、この学園の天才引き篭りな少年が、技術的な不可能をブレイクスルーしたとか」

「天才引き篭り？　若しかして橋本祐希の事か？」

「そうだよ。例のゲームも高倉コーポから発売だし、彼って高倉のお嬢様と恋人なんでしょ？」

「そんな噂があるな」

体育には基本的に出席はしないで見学し、他の教科では満点ばかりの天才児、橋本祐希が高倉コーポレーション社長の三女の、高倉翔子と三年くらい前から付き合っているという話は、結構な語り種である。

身体的な虚弱症だとかの所為で、学校以外では引き籠りの少年だった橋本祐希だが、中学時代に衝撃的な告白を高倉翔子から受け、それにイエスと返事をしたのだとか。

詳しくは2人も寡分にして知らない、然しある程度の内容は伝わっていた。

概要で云うと、『貴方の頭を私の身体で買うわ』……というもの。

美少女だった故に、告白を聞いた周囲の男子連中が悔しがったらしい。

噂を聴いた時は、どんな頭脳だよと思ったものだったのだが、本当にＶＲＭＭＯを開発したというなら、話の通り相当の天才という事なのかも知れなかった。

これで高倉コーポレーションはゲームの分野のみならず、様々な分野で頭一つ抜きん出る事だろう。

閑話休題……

「若し、噂が本当なら嬉しいんだけどな」

「ＶＲＭＭＯのＲＰＧって云えば、彰ちゃんの憧れでプレイは夢だったからね」

「ああ！」

放課後もいい加減、生徒の下校時間が過ぎてきて、彰吾と百合は家に帰宅して【英雄譚（インフィニット・ブレイバー）】のプレイをする事になった。

「じゃあね、彰ちゃん」

「応、またゾアーナ大陸で会おうぜ」

「うん！」

この２人、単純に幼馴染みというだけでなく、ベタなお隣同士で家族ぐるみでの付き合いがあるという、ある意味では恵まれた環境だったりする。

彰吾が家に入ると、玄関に大きめの包みがデン！　と置かれていた。

「何だこれ？　母さん！　この包みって何？」

「知らないわ。彰吾が頼んだものじゃないの？」

「……は？」

彰吾は戸惑いを隠せないでいる。何しろこんな大きな梱包が必要な荷物など、頼んだ覚えがないからだ。

首を傾げながら宛名を見てみれば、其処には確かに【上月彰吾様】とある。

「あ、本当だ。俺の名前が書いてある」

とはいえ、彰吾にこんな荷物の覚えは無い。

「どっから送られてきたんだろ？」

彰吾が送り主の名前を見てみれば、其処に書かれていたのは【高倉コーポレーション】だ。

つい先程、学校で名前が挙がったばかりの会社名、それには余計に戸惑う。

高倉コーポレーションから何かを送られる理由が思い付かない。

「取り敢えずは部屋ん中に運び込むか」

どっこいしょっと、荷物を持ち上げて部屋へと運び込んだ彰吾は、包装を解いて中身を広げてみる。

その中には……

「ＭＭＯバイザー？　少し形が違うけど」

まんまな名だが、ＭＭＯバイザーと云うのはＭＭＯゲームの為に被るバイザー型のディスプレイだ。

これを被り彰吾は大規模ネットワークＲＰＧゲームをプレイしている。

だけど形状が彰吾の知るＭＭＯバイザーとは可成り別物で、首を傾げながらも中身を取り出していく。

入っていたのは本体とも云えるＭＭＯバイザーらしき機器と、βと書かれている量子ディスク。

更には取り扱い説明書っぽい用紙に、コンバート用プラグ、そして申し送り状であった。

彰吾は、現状を把握するべく申し送り状を読んでみる事にする。

【拝啓　この度はおめでとうございます。貴方様は弊社が開発致しました世界でも初のＶＲＭＭＯ―ＲＰＧ『夢幻王（インフィニット・ドリーム）』のβテスターとして当選しました。尚、選考基準は前作、前々作をプレイされたお客様の中から、無作為に抽選で選考しております。参加人数は二千人で期間は一ヶ月、弊社の新しい形のＲＰＧをお楽しみ下さい。　高倉コーポレーション敬具】

「って、マジか？」

確かに前作【英雄譚（インフィニット・ブレイバー）】でも、βテスターは前々作の【幻想界（インフィニット・ファンタジー）】のプレイヤーから無作為に選ばれたと聴いた。

「うん？　ＰＳ……弊社が新開発したＶＲバイザーでお楽しみ下さい？　ＶＲバイザー？」

どうもネーミングセンスの良いスタッフがいなかったらしく、またもやまんまな名前で攻めてきた様だ。

彰吾は取り扱い説明書を読みながら、ＶＲバイザーのセットアップを始める。

「然し、バイザーは返却しなくて良いなんて、随分と太っ腹なんだな」

高倉コーポがこの２～３年で可成りの急成長をしていると聴くが、こんな高価な物をポンと送る辺り、思っていた以上らしい。

セットアップも完了し、彰吾はＭＭＯバイザーの方を被ると、百合へとメールを送る。約束を反故にする事になるのは心苦しいが、やっぱり早く試したい衝動が沸き立つし、今日はもうアクセス出来ない事を伝えねばなるまい。それに……

「送信っと」

百合の事だからきっと、このメールを見れば飛んで来る筈。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

【同時刻】

「遅いな、彰ちゃん」

赤坂百合は既にログインをして待っていた。

時間にルーズでない彰吾が遅れるなら、それは相応の理由が有ると理解してはいるものの、せめて連絡の一つも欲しい。

ピコン！

電子音が響き、メーラーが起動したのを確認して、百合は送信されてきた内容を読む。

「何々、高倉コーポレーションから【夢幻王（インフィニット・ドリーム）】のβテスターに選ばれた？　今日はそちらに集中したいからログイン出来ない……って、何よそれは！」

百合は叫ぶとログアウトして直ぐにも階段を駆け降りて、母親に行き先を告げると隣の家に駆け込んだ。

「おば様、こんにちは！」

「あら、百合ちゃん」

「彰ちゃん、居ます？」

「ええ、帰ってから何処にも出掛けてないわ」

「ありがとうございます」

礼を言って二階へ駆け上がると、百合は彰吾の部屋の扉をノックした。

「彰ちゃん、居るよね？」

「おお、入れ」

返事を聴いた瞬間、扉を蹴破る勢いで開く。

「彰ちゃん！　あのメールってなに……してんの？」

百合の見た事もない様なＭＭＯバイザーを弄る彰吾の姿に、思わずそちらへと目が行って訊ねた。

「ＶＲバイザーだってさ」

「ハァ？」

彰吾が詳しく説明をすると神妙な表情となり先ずは偽物を疑ってみたものの、それを証明するモノは得られない。

其処で、空いている彰吾が元々持っていたＭＭＯバイザーでネットに繋ぐと、高倉コーポレーション公式ホームページに入り、情報が何かしら無いかを確かめてみると……

「嘘、有った」

公式ホームページには、確かな情報として【夢幻王（インフィニット・ドリーム）】のβテスターが決定して、二千人のテスターの候補者へとＶＲバイザーとβ版の量子ディスクを送った旨を伝えていた。

更新が今日という事は、これらが送られたのは数日前の筈で、少なくとも騙りではあるまい。

目に見えて落ち込む百合を見て彰吾も少し困ってしまうが、だからって折角のβテスト版のプレイを諦める心算などなく、取り敢えずはラインを繋いでおけばＭＭＯバイザーで観賞だけは出来ると教えた。

尤も、本当に観賞だけで干渉は出来ないのだが……

「さて、始めようか」

ゲームをスタートするとガイダンスが始まり、それに従ってキャラメイクを行っていく。

そのシステムは、前作のものをその侭にしたかの様なものらしく、使い勝手の良いインターフェースだ。

アバターを作成、数値の変更、職業の変更などをして全ての作業が終了。

遂に、彰吾の分身（アバター）が雪景色の大地に降り立つ。

光と共にアバターの誕生を祝福され、そして彰吾は――ショーゴは口を開いて第一声を世界への産声として上げる。

「寒っ！　さみーよ！」

百合は思わずズッコケたものだった。

.

第2話：リュキ

・

辺り一面の銀世界。

右を見れば雪、左を見ても雪、前も後ろも地面の全てが雪で覆われて、成程……通りで寒い訳で彰吾が顕れた位置は雪山だった。

だが、この手のゲームは普通だと比較的に安全な街がスタート地点の筈。

こんな誰も居ない雪山に放り出される事など有り得ないのだが……

「っていうか、マジに寒いってどういう事だよ?」

ガチガチとシバリングで何とか肉体が暖を取ろうとしているが、焼け石に水処の話ではない。この侭では凍え死んでしまいそうだ。

「まさか、これでＨＰが減って死亡なんて無いよな」

彰吾はメニュー画面を呼び出して、ステータス値を確認してみた。

「ＨＰ、ＨＰ……っと、有った。え～と、２５０か」

ステータスには……

ＨＰ：２５０／２５０

この様に記されている。

「今の処は減ってないみたいだな。けど、状況次第で減る可能性も否めないし、何処か落ち着ける場所を捜さないと……」

先ずは何をすべきか？　旧きＲＰＧの伝統ある格言に斯くあり、武器や防具は装備しないと効果が無い。

そして、現在の彰吾――ショーゴの装備は【アンダースーツ防御：１】という軽装と言うのも烏滸がましい姿である。

ショーゴは前作、前々作をプレイしたヘビーユーザーであり、それ故に能力値に関しても知っていた。

防御力は基本的に１から始まって、レベルが１０増える度に１増えるシステムとなっている。

つまり、レベル１の時の防御力１に＋２５０までは上がるから、最高防御力が２６……これが何も装備しなかった場合の最大値。

僅か２６が最高レベルでの最大防御力だというのだから、正に紙防御である。

このゲームのシリーズは根本的に防具類の防御力に依存しており、素の防御力など身体の頑丈さを示しているだけの飾りなのだ。

ステータス値はプレイヤーがボーナスポイントで、自由に上げられるシステムだが、その内のＤＥＦだけは先に述べた通り。

レベルアップで獲得出来る３ポイントを各々……

ＳＴＲ……腕力

ＡＧＬ……俊敏

ＶＩＴ……体力

ＩＮＴ……賢さ

この三つへと割り振る。

ＡＴＣはＳＴＲ＋武器の攻撃力、ＤＥＦは１＋ＬＶ１０毎に＋１＋防具の防御力という事になり、現在のショーゴは攻撃を受けたら簡単に死ぬ。

寒さに震えながらメニュー画面のアイテム欄を調べてみると、一応は初期装備がストレージに格納されているのを確認出来た。

「これは仕様か？　それとも不具合なのかな？」

初期装備はストレージの肥やしだわ、行き成りフィールドに放り出されるわ、どう考えてもあり得ない。

「まあ、正規版では直る様に運営に報せるか……」

アイテムストレージ内の武器と防具を選び、装備してみれば防具を纏い、武器を手にする事が出来た。

ショーゴ
剣士
ＬＶ：１
ＨＰ：２５０

MP：20
ATC：26
DEF：5
STR：15
VIT：8
AGL：10
INT：6
【WEAPON】
ショートソード＋3
性質：斬突
属性：なし
上幅：1
最大：3
威力：8＋3
【ARMOR】
クロース
性質：なし
耐性：なし
上幅：1
最大：3
防御：3
【SHIELD】
なし
【ARM】
なし
【LEG】
サンダル
性質：なし
耐性：なし
上幅：1
最大：3

防御：1

【ＳＫＩＬＬ】

レイジング・ブレイク

怒りと共に能力が上がる

一文字斬り

剣を振ると一文字の衝撃波が敵を斬る

「ショボっ、改めてみると滅茶苦茶ショボい！」

レベル1で、初期装備ならこんなものだろうけど、余りの弱さに泣きたい。

「って、何かなこのスキルは？　レイジング・ブレイクねぇ……」

前作と前々作のデータをコンバートしたら、武器とスキルに特殊な＋が有るのがお約束で、ショートソード＋3の〝＋3〟が武器に於ける特殊措置だとして、スキルのレイジング・ブレイクはいまいち判らない。

「怒りの破壊？　意味不明だよな」

ブルッ！

初期装備を身に付けたからといって暖かくなる訳ではなく、この如何ともし難い寒さを早いとこ何とかしなければ凍え死にそうだ。

「動けば暖まるかな？」

モンスターでも湧出（ポップ）すれば戦闘で暖まる事も出来るだろうし、経験値もアイテムもお金も手に入るというもの。

彰吾はウロウロと真っ白な雪景色のフィールドを、宛てど無く歩き始めた。

数分も歩くと、ウサギらしき生物が飛び跳ねているのを見付ける。

「雪山の動物か？　けど、そうだな……ＶＲＭＭＯの感覚を掴みたいし、破壊可能オブジェクトなら試しに斬ってみようか」

人間が相手なら辻斬りを宣言するも同じなセリフを宣い、彰吾はショートソード＋３を腰から抜刀して、ウサギっぽい生物へと斬り掛かった。

不意を突かれたからか、ウサギっぽい生物は躱す事も出来ない侭に、真上からの斬撃を受けて真っ二つに裂かれてしまう。

血飛沫を辺りに撒き散らしながら積雪の中に沈み、ショートソードにも血痕がヌラリと残っている。

「ちょっ、リアル過ぎないか？　これ……」

小さな子供が見たなら、トラウマになりそうなショッキング映像に、彰吾は思わず叫んだ。

ピロン！　という電子音が鳴り響いて、メッセージウィンドウが顕れる。

『スノーラビットを倒した……経験値１２を加算』

「って、あれモンスターだったのか？」

どうやら先程のウサギっぽい生物、モンスター扱いだったらしく経験値が加算された様だ。

更にリザルトウィンドウからメッセージが流れて、幾つかの情報も獲られる。

『素材：スノーラビットの毛皮　素材：スノーラビットの毛皮　を手に入れた』

要するにスノーラビットというモンスターが、毛皮というアイテムをドロップしたらしい。

つまり、このモンスターは非アクティブ型であり、近付かなければアクションは通常のものしか取らず、此方から近付けば何らかのアクションを行う。

お金を落とさないという事は、素材やら何やらドロップした物を売って換金するタイプという事だ。

「このスノーラビットの毛皮って、幾らで売却出来るんだろう？」

アイテムストレージへと格納されたアイテムを見ながら歩き出すと……

「待ちなさい！」

メゾソプラノの声が雪山に響き、彰吾の耳を打つ。

声質が明らかに女の子、しかも高さから同い年くらいと思われる。つまり他のプレイヤーが居たという事なのだろう。

彰吾が振り返ると……

「貴方、どういう心算？」

如何にも『私、怒っています！』といった風情で、防寒具らしき服装に身を包んだ少女が立っていた。

この時、彰吾が思った事はたったの一つ……

「(暖かそうだな)」

少女の纏う防寒具の……暖かそうな厚着への憧憬だったという。

「えっと、何？」

「貴方は先程、スノーラビットを殺しましたね？」

「へ？　拙かった？」

相手はモンスターだし、スノーラビットは能動的に襲ってくるタイプではなかったが、場合によって斃さなければ此方が殺られる。

それなのに、この少女は殺した事を怒っていた。

「モンスターだし、殺さなきゃ殺されたかも知れないんだ。仕方ないだろ？」

「誰が殺した事を言いましたか？　殺したなら責任を負いなさい！」

「せ、責任？」

「襲われたならまだしも、見ていましたよ？　貴方は剣の試し斬り程度の気持ちで、脅威にならないスノーラビットを殺した。なら、食べるべく持っていくべきなのに、捨て置くなんて」

どうやら思った事とは、随分と違った憤りの様だ。

「私は猟師として、そんな蛮行は赦せません！」

「りょ、猟師ぃぃ？」

「な、何です？　猟師だと何か悪いんですか？」

インフィニット・シリーズには、プレイヤーが職業に就いて固有武器やスキルを使う。正確には武器装備に制限は無いが、職業による優遇はある。

例えば、彰吾の剣士。

剣を使うと若干だけど、ダメージに＋補正が入り、初めから剣のスキルを一つ覚えている。

スキル熟練度も僅かながら上がり易い。

弓を扱う職業も在るには在るが、それは弓兵という名称であって、猟師などとは寡聞にして聴いた事が無かった。或いは新シリーズで追加されたとも考えられるが、ガイダンスから猟師なんて説明を受けてない。

ならば考えられる可能性はたった一つ、彼女は向こうに意思在る人間が居ないＮＰＣだという事だ。

「（ならこれ、イベントか何かなのか？）」

斃したモンスターを放置する事をフラグに、目の前の少女が現れてイベントを起こしたのかも知れない。

「へえ、良く出来た受け答えの仕方だな。しかも作り物には見えないディテールも凄いし……」

ＮＰＣなら遠慮は要らないとばかりに、彰吾はペタペタと少女に触れる。

それはもう、ペタペタと頬に、頭に、腕に、更には薄い胸に……

「い……」

「い？」

「いやぁぁぁぁぁぁっ！」

「へ？」

呆然としていたかと思ったら、行き成り真っ赤な顔で絶叫を上げると、腰に提げていた弓を左手に、背中の矢筒から矢を引き抜き、それを番え……

「変態！　変態！　変態！変態！　変態ぃぃっ！」

彰吾に向けて次々と矢を射ってきた。

「うわ、うわ、うわっ！」

ヒュン、ヒュン！　と、風を切る音を響かせつつ、放たれた矢が向かってくるのは流石に怖い。

少女は連続で矢を放ってくるが、狙いを付けている訳ではないのか、当たる事はなかったが最後の一矢が彰吾の尻にヒットする。

プスッ！

「うっぎゃぁぁぁぁっ！」

辺り一面銀世界の山の中にて、間抜けなダメージを受けた彰吾（バカ）の絶叫が谺したという。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

ＨＰが僅かに減り、現実より少しマシ程度の痛みが襲い、手持ちのポーションを使って治療する。

ＨＰがみるみる回復し、満タンになると同時に痛みも消えていく。

少女はというと、自身が放った矢を回収していた。

彰吾は傷の治療を終え、少女も矢の回収が済んだ処で少し気まずい空気が一面を漂う。意を決した彰吾が少女に話し掛ける。

「さっきはごめんな。君はひょっとしてプレイヤーだった？　てっきりＮＰＣかと思ってさぁ、アハハハハ……」

寧ろ、ＮＰＣだからといってセクハラ紛いの事をしている方が痛い子だ。

プレイヤーに見られてしまうと、死にたくなるくらいの恥を掻く。

だが、少女は意味が解らないといった風情で、首を傾げながら訊いてきた。

「プレイヤー？　ＮＰＣ？　貴方、いったい何を言っているの？」

「は？」

「私はリュキ。ここら一帯で猟師をしてるわ。それで変態さん、貴方の名前は？　取り敢えず番所に突き出して上げるから」

未だにご立腹らしい。

「いや、だからごめん！」

「ごめんですむなら番所も騎士隊も要らないわ！」

「その、君の……リュキの服が暖かそうで、つい」

少し苦しい言い訳だが、半分は本当の話だ。

少女――リュキは彰吾をジッと見つめ、大きな溜息を吐く。寒さ故の白い吐息が口から吐き出され、その表情には呆れが見える。

「それは寒いわよ。そんな薄着で雪山に登るなんて、登山を舐めてるの？」

「いや、そんな心算は無いんだけど……」

「まあ、良いわ。付いて来なさい。家に案内したげるから」

「良いのか？」

「今見捨ててそこら辺で冷たくなって転がってたら、寝覚めが悪いからね」

「た、助かるよ」

礼を言おうとした彰吾、だがリュキが突如として佩いていた鉈を抜き、真っ直ぐに構えると、ドスの利いた声で言った。

「万が一に襲ってきたら、貴方の股関にぶら下がっている粗末なモノを、この山伐刀でぶった斬って二度と欲情出来ない様にしてやるからね？」

ギランと鈍い輝きを放つ山伐刀は、獲物を骨ごと断ち切る仕様なのだろうか、重々しくも切れ味は抜群といった感じである。

故に彰吾は……

「はい」

冷や汗と共にリュキの言葉に頷いた。

・